

が1歳までに死亡するといわれている予後不良疾患である。今回妊娠中に18トリソミーの診断を受け、出生後NICUでの積極的治療を希望された事例の看護を体験したので、母の出産直後からの心理的变化に着目し、わが子に対する思いを新生児看護に携わる立場から考えた。

【方法】 児との面会中の母の発言を分娩直後から日齢120までの間ファミリーケアシートの記録より振り返り、「わが子に対する母の思い」を質的機能的に分析した。

【事例紹介】 母は1経産婦で第1子を帝王切開にて出産している。第2子妊娠中に18トリソミーとの診断を受け経腔分娩にて出産した。告知を受けてから産科医師、助産師、NICU医師、看護師を交え話し合いを重ねて分娩に至った。児は生後保育器収容、N-CPAPでの呼吸管理を行い、日齢13日に動脈管結紮術を受けている。

【結果】 分娩直後から日齢120日までの母の発言より浮かび上がってきたのは、「経腔で産んだ喜び」「わが子を抱けないのではないかと葛藤」「わが子が生きているという喜び」「育児を通じての母親としての喜び」「わが子が父方祖父母から祝福されないことについてのわだかまり」の5つの場面である。今回の事例では出生前での話し合いを重ねて情報提供や母が意志決定できるだけの十分な説明を行ったこと、そして母が決定した方針を支持できたことということが母の喜びにつながったと考えられる。予後不良な児を産む母の戸惑いや心理状態は計り知れないものがあること、家族である父方祖父母の言動は母親の心理的安寧を低下させることにもつながる。限りある命を考えるとわが子を家族の一員として受け入れ、愛情を注ぎたいという母の希望に添うためには、我々医療者は家族を含めたサポートを行うことが重要であると再認識させられた。

【まとめ】 今回の事例を通して①妊娠中から産科と蜜に連携をとり、胎児異常の告知から分娩に至るまで、および分娩後も継続したチームとしてのサポートが必要であること、②母親の育児や愛情を育む過程でのNICUでの支援が必要であること、③予後不良という疾患であることから家族にとってより良い時間を過ごせるための支援が必要であることが分かった。私たちNICU看護師はこのようなケースに出会うことはまれなことではない。今後も週産期医療に携わるチームとして情報交換や連携は欠かせない。そして母親の思いはさまざまであることから個々にあったケアを提供することが大切である。今回の経験を生かしより良い看護を提供できるよう今後も取りくんでいきたい。

4. 先天性疾患のある児を出産した母親の心理反応の変化 —先天性食道閉鎖症—

渡邊美奈子, 恵良真由美, 石田 綾子

木村 敏江 (群馬大・医・部附属病院・

周産母子センターNICU)

早産で低出生体重児を出産した母親が、出産後に初めて、児に先天性食道閉鎖症があることを伝えられた。児は出生直後にNICUに入院し、根治手術などを行ったことから、母親は慌ただしく様々な体験をしたことになる。このことを踏まえ、NICUでの面会中にみせた母親の言動などから情報収集し、クラウドとケネルの「順応の各段階」を用いて、先天性疾患のある児を出産した母親の心理反応がどのように変化するかを明らかにした。

第1段階：ショック 「夫と2人で泣いてばかりいた」というような発言があり、出生後から手術を行った日齢1頃が相当すると考えられる。**第2段階：否認**、**第3段階：悲しみ、怒り、そして不安** 「何でうちの子が」、「もう、心配で」、「妊娠中に私が何かしっちゃったのかと悩んだ」というような発言があり、日齢2～5頃が相当すると考えられる。第2段階と第3段階は重なって現れていたと考えられる。**第4段階：適応** 児の経過は良好で、母親は育児に積極的に参加できるようになり、発言から少しずつ混乱が鎮まっているのがうかがわれ、日齢5頃以降が相当すると考えられる。**第5段階：再起** 「大きくなりましたね」、「今は何とかほっとしています」というような発言があり、受容ができてきていることがうかがわれ、日齢40頃から相当すると考えられる。

以上より、この母親は、児を受け入れる際に、「順応の各段階」をたどっていたことがわかった。今回、クラウドとケネルの「順応の各段階」を用いたことで、対象者である母親が直面している心理状況、心理段階が明らかになった。順応の各段階の持続期間には、児の持って生まれた疾患の性質に影響を受けることがわかっているが、この事例は、手術によって根治が望めること、日に日に状態が良くなり成長が実感できたことなどが大きく影響していたと考えられる。また、この結果を踏まえ、各段階に応じたアプローチの必要性が明らかになった。例えば、出産直後は母親だけでなく父親もショックを受けていることから、特に看護師のサポートが必要となり、重要であることがわかった。今後、出産後間もない時期からの看護サポートや、産科との情報交換などの検討すべき点が浮かび上がった。